

主従が変容する空間の質  
— 日常の価値再考 —

22119027 醍醐 愛莉  
指導教員 宮 晶子 教授

主空間	従空間	変容
意識	機能	影響

### 1 背景と目的

日々の予測のできない変化に心踊る瞬間がある。日常の予測可能なパターンから外れ、変わることに興味を持った。空間の変化は、感情の整理やストレス解消、心理的にもリフレッシュしたり新鮮な感覚の維持にも繋がる。これらは日々のモチベーションを上げ、生活の豊かさに繋がると考える。

建築家黒川紀章によると、建物の中を中心的な場である主空間とそれに付随する従空間に分けると、機能・象徴の変化という空間の質の変化を起こしやすいのは従空間である。しかし現在、様々な建築において主空間と従空間の一体化が進み、変化を起こしやすい従空間が消失しつつある。一体化してしまうと、空間の機能が混ざり合い混乱を招いたりプライバシーが損なわれることがある。また、従空間を設けることによって心境の切り替わりや、均一すぎない空間が構成されていると感じる。(図1)

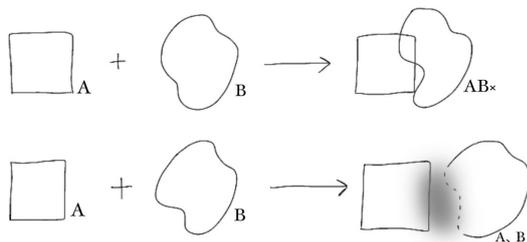


図1 Aの空間とBの空間の間に従空間を置くことで心理的転換の場として緩衝領域になっている

本研究では、主空間と従空間の一体化が進む現代の建築において、従空間の価値を再評価し変化を起こす空間の提案をする。

## 2 主空間と従空間

### 2-1 主空間とは

主空間とは建築物の中で中心的かつ最も注目される領域のことである。この空間は、他の付随する空間との関係を考慮して設計され居住者や来訪者が集まり、交流し、活動する場として機能する。主空間はその役割と象徴性において、空間全体の質と魅力を左右する重要な要素となっていることが多い。

本設計では学生の個室や共有スペースなど人が滞在する場を主空間とする。

### 2-2 従空間とは

意識下に沈む領域として補完的な役割を果たす空間のことである。曖昧な領域である為空間の質の変化を起こしやすい性格を持つ。主空間から派生し、サポートする役割を持つが、直接的な活動の場ではない。主空間とのバランスを保ちながら、機能的な需要を満たす。また、従空間は主空間に対して形態的に作用することで、空間に多様性を与えている。影響を与える存在としてそれぞれ異なる目的と機能を持つ従空間があることで、主従を合わせた空間全体に様々な活動や魅力などの多様性を創出している。

本設計では通路、廊下、裏庭、階段など人が移動したり休憩したりする場を従空間とする。

### 2-3 空間内の主従関係

主空間は建物の中心的な活動の場であり、従空間はその活動を支える役割を果たす。例えば、リビングルームが主空間である場合、廊下や階段、などの従空間がそれを取り囲み、快適な生活環境を提供している。機能と行動に対応した従空間を持つことで主空間と従空間は機能的な補完関係が成り立っている。

## 3 意識内の主従変容

コロナ禍では、衣食住という主の部分よりも音楽、芸術、散歩といった日々の生活に必須ではない従的なものほど必要とされ、生活の主となっていた。従空間を印象的な豊かなものとし、日常の中でふと主要なものとなることによって主従の機能は変化せずに意識上で反転する。主空間が意識下に沈み、従空間が軸になる瞬間をつくることで空間の質は変化するのではないだろうか。

## 4 敷地

敷地は東京都中野区哲学堂公園内の調節池とする。中野区北部地域における都市観光のアクセス拠点として中野駅を、中核都市観光資源として哲学堂公園を位置づけ、それらを結ぶまち歩き回遊ルートの歴史・文化の回廊がある。哲学堂公園はこのような中野区の歴史、文化を活かした都市観光拠点となりつつも老若男女問わず地域の

人が集まる居場所となっている。(図2)

また、妙正寺川沿いの調節池に敷地を設定することで普段は歩ける場所でも、雨が降った際には敷地に川の水が流れ込んで水が溜まり1階部分は浸水する。天候によって床レベルが変わることで空間の質の変化を起こすきっかけになることが出来るのではないだろうか。

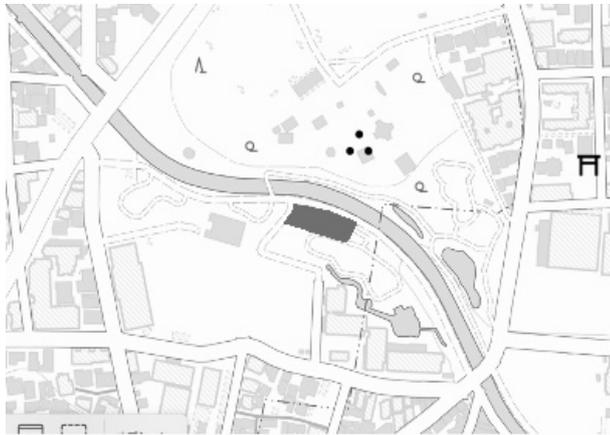


図2 敷地周辺

## 5 設計提案

予測の変わる建築として様々な角度から空間の質の変化を起こし、従空間のある意味を再考する学生寮を提案する。また、従空間で人々が自然に出会い交流する場所として学生同士の偶然の出会いを起こし、新たなコミュニケーションの場として社会的な交流の促進を目指す。

### 5-1 用途

本設計の用途は公共空間の伴う学生寮とする。廊下などの従空間を備え、主空間と一体化していないことや空間の質の変化を感じられるようにする為、長期滞在型で建築に触れる時間が長いものが適していると考えた。また、住宅で過ごすよりも他の学生と過ごす時間が多く公共性が強い分、学生個人の部屋と共有のリビングルームやキッチンなどの共同スペースに行くまでの気持ちの切り替わりに寄り添う従空間が必要であると考えた。

### 5-2 従空間の再評価と主従配置

現代の建築で従空間はスペースの有効活用やコスト効率などの観点からいらぬものとされ消失しつつある。本設計では従空間の持つ心理的転換性に着目しこのような従空間の価値の呼び起こしを図る。

従来の主空間の配置では個室は群となりまとまり、カフェなどの公的な主空間とは分割されている。(図3) 学生個人の部屋などプライベート性の強い個室主空間同士を集めるのではなくそれぞれを離し、カフェなどの公共性の強い公的な主空間と近づけることで間の従空間の

価値を再認識できるのではないだろうか。(図4) プライベートな空間と公共性のある空間の差が大きいほど従空間は心理的転換の場としての性質を展開すると考える。

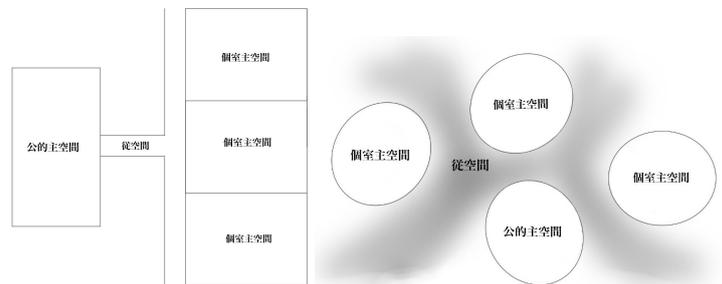


図3 従来の主空間と従空間の配置

図4 提案する主空間と従空間の配置

## 5-3 空間の質の変容

### (i) 動線幅

空間幅の太さを緩やかに変化させることでいつの間にか他空間にいる。動線だと思って歩いていても縁の方に行くと滞在、交流できる場になっている。

### (ii) 家具

従空間に家具などの空間の象徴になるものを配置することでA点とB点を繋ぐ単なる動線ではなく意味を持つ空間を創出する。

### (iii) 外界との繋がり

学生寮内部に外部空間を配置したり、暗闇に光が差し込む空間を設けることで、訪れる度に変化のある空間となる。

## 6 まとめ

このように曖昧な性格を持つ従空間において、空間の質的变化を引き起こし、心理的転換の場として機能させる。これにより従空間の存在価値を再認識することを期待する。

従空間がもつ曖昧さと多様性は、空間の利用方法や体験に変化をもたらすと考える。したがって、従空間の設計と配置は、空間全体の質を向上させる上で重要であり、空間の変化を誘発することで日常生活の豊かさに繋がるのではないだろうか。

## 主要参考文献

『メタボリズムの美学行動建築論』黒川紀章/彰国社/1979

『ルイスカーン建築論集』前田忠雄/鹿島出版会/1992  
『建築の多様性と対立性』ロバートヴェンチュリ/鹿島出版会/1982

『道の建築：中間領域へ』黒川紀章/丸善/1983